拳銃の詩

ハジキ　うた

藤原審爾

角川文庫

昭和五十四年二月二十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

拳銃の詩

著作者　藤原審爾

発行者　角川春樹

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(263)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・本間製本

0193-125706-0946(0)

拳銃の詩

藤原審爾

角川文庫
4271

目次

おれの拳銃は歌をうたう　五
悪魔が椅子をくれる　一〇五
最後はおれが笑う　二三三
解説　権田萬治　三六八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

おれの拳銃は歌をうたう

〈登場人物〉

阿久根	私立探偵
夏木　鳥子	事件依頼人
夏木　伸子	行方不明の妹
篠　村	伸子の情夫
竜	用人棒
織　部	織部会会長
留　理	ホステス
国　吉	本庁の刑事
岩　井	元刑事

最初の依頼人

その娘がおずおずとおれの事務所に入ってくるのを見たとき、おれは、いつかタクシー会社から走り出たばかりの、おろしたての新車を停めたことを思い出した。歩道のおれの前に匂いのする新車を停めた運転手は、ドアーを開けるかわりに、窓から顔を出し、一メートル八十センチあるおれへ、こう言った。

「旦那は、女ですか？」

おれはその日少々機嫌がわるかった。

「おめえの目玉は裏返しになってるぜ、なおしてやろうか」

「すみません。この車はおろしたてなんで、最初の客は、女にしてえんです。あっしはどっちだっていいんですがね、相棒が縁起をかつぐんでね」

もう一度、すみませんねえと言って、そいつはおれをおっぽりだしていっちまった。

その娘は、最初の客にしては、かなりおれの期待を裏切った、みすぼらしい身なりだったが、女であることには間違いはない。おれは最初の客だけは、相当の報酬になるのを撰ぼう、そういう商魂をもたなければならないと決心していたのだが、つい運ちゃんのように縁起をかついでし

まったんだ。まったく馴れぬ縁起なんか二度とかつぐものではない。今度おれに、「旦那は、女ですか」ときく運ちゃんは気をつけたほうがいい。おれは、返事をする前にぶン殴っちまうぜ。

新宿の西口にあるビルの一室を借りたおれの事務所へ、おずおずと入ってきた、茶色の縁の眼鏡をかけた二十二、三の娘は、午後の冬陽が当たった窓を背にして、デスクのこちらの回転椅子に腰かけたおれへ、

「阿久根さんでしょうか」

とおそるおそる言った。

「ドアーのネームを見ずに入ってきたのか」

おれは出来るだけ愛想のよい笑顔で答え、デスクの向こうの客用の皮張りの肘掛け椅子の一つをすすめた。おれの冗談は彼女の頭の上を通りすぎ、むなしくドアーに当たって落ちただけだった。彼女はにこりともせず、ちょっとためらってから、椅子に腰をおろした。おれは煙草に火をつけながら、素早く彼女を観察した。黒いレインコートはレディーメードで、彼女の小柄なからだには、ほんのちょっぴり大きすぎたが、それが却って彼女を可愛らしく見せている。眼鏡をかけたまるい化粧気のない顔は、最初の印象よりずっと健康でいきいきしていて、よくある〝チビの利口な娘〟という感じだった。こころもち茶色っぽい髪がその顔をやわらかく、ふわっとつつんでおり、それがばかに色っぽかった。膝の上の可愛い手は荒れてなく、しっかり黒いハンドバッグとおれの仕事の広告が出ている新聞の朝刊を抑えていた。ハンドバッグも靴もつかい古され

たもので、まず手の荒れぬ仕事をやっているＯＬと考えてよさそうだった。
観察しているうち、おれは、だんだん商売気がなくなってきた。とてもおれが要求する費用は出せそうにない。たとえ出してくれたとしても、ＯＬの貯めた金は、貰って寝覚めがわるい。
「ところで、おれの用件は？」
おれの声で、彼女は、もじもじっとした。それから顔をあからめた。
「あのう、あたし、お金がたくさんないんです、……こんなことはじめてなんです、あのう、どのくらいあればいいんでしょうか？」
すがりつくように見られて、おれはがっかりしながらあわてて目をそらした。
「仕事次第なんだが、……どういう仕事だね」
「妹をさがしてもらいたいんです」
「一日一万円で、費用はそっち持ちなら引きうけよう」
思いきって、はっきり言ったのだが、彼女は思ったほどおどろかなかった。
「何日くらいかかるのでしょうか？」
「五日だろうな、五日でさがせなければ、おいそれとは見つからないだろう」
彼女ははたしておれを信用してよいものかというように、殺風景な部屋を見まわした。むろん信用の証拠になるものなんかあるはずがない。彼女は大きな息を吸いこみ、やはりおれに頼るより方法がないという顔になった。そしてハンドバッグをあけ、一ト束の一万円札をとりだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

真剣な手つきで一枚一枚丁寧に数え、三十枚を別にした。ちょうど三分の二ほどが彼女の手もとにのこったが、そこで彼女はもう一度考えて、十枚ひいて二十枚を別にした。

二十枚の一万円札をもう一度数えなおし、それからそのお金をおれのデスクの上にさしだして言った。

「たった一人の妹なんですわ、どんなことがあってもさがしてもらいたいの。一ト月かかってもいいわ、そのかわり絶対にさがしてもらいたいんです」

彼女の目には涙がいっぱいたまっていた。

おれは、おれの最初の可愛い依頼人が、気軽にしゃべれるように、近所のフランス料理店へ連れていった。夕食時間にはまだ間があるので、店には客が少なかった。

白いレースのカーテンのかかった窓ぎわのテーブルで、向かいあって腰かけ、おれはダブルのハイボールをのみ、彼女はブランデー入りの紅茶をすすって、妹のことを話しだした。

彼女の名は、夏木鳥子（なつきとりこ）といい、名古屋のある医院の看護婦さんだ。彼女の父親は、福岡の銀行に勤めていたのだが、融資した金がこげつき、突然、行方（ゆくえ）をくらました。あとにのこされた母親は、赤ン坊の彼女を連れて履物屋（はきものや）と再婚し、その翌年、彼女の妹を産んだ。中学校の頃（ころ）にはじめて自分の身の上を知った彼女は、中学を卒業するとすぐ家を出て、病院の看護婦見習いになり、それから国家試験にパスしたそうだ。履物屋の家のほうにのこった妹は、その後両親が亡くなり、

家を売って三年まえから東京に出てきている。彼女のほうも妹のいる東京へ出てくるつもりで、広島、大阪、名古屋と勤めをかえてきたそうなのである。

半年ほど前、彼女が東京の妹へ、名古屋の医院へ移ったことを知らせてやると、折り返し返事がきた。その手紙には、ナイトクラブを持ったお金持ちのハンサムと結婚するつもりだ、そのうち、ベンツで名古屋へ一緒に行くなどと、羨ましいことがいっぱいかいてあった。しかし、二か月ばかり経ってから、今度は、まるで哀しい手紙がきた。結婚しようと思った男は暴力団だった。別れたら殺すとおどかされているが、どうしても別れたい。逃げて名古屋に行くから、どこかに部屋を借りてほしい。出来れば一緒に住みたいという文面だった。半月ばかりして部屋を見つけて、連絡すると、今度は、やっぱり別れられない、東京で暮らすという返事がきた。手付け金を損した彼女は、一時、癪にさわって二度と世話してやるものかと決心したのだが、そのうちまた心配になり、手紙を出してみたところ、アパートから移ったらしく手紙がもどってきた。移転の通知を待っていたが、それも来ない。そこで相手の男への気付けで手紙を出したが、三通とも返事が来ない。なんだか胸さわぎがしてたまらないので、医院から休暇をとって、上京してきたというわけだった。そして篠村という相手の男に会ったが、はじめはそんな伸子というような女は知らないと言い、証拠をあつめて責めると、あの娘なら一ト月ばかり前にきて台湾へ行くと言っていた。それっきり会ったことがないと言うだけで、まるきり話にならない。もしかしたら殺されたのかも知れない、――と、真実そう思っているような顔で彼女は言うんだ。おれは、まさか

と笑った。

「人殺しほど損な仕事はないんだぜ」

しかし彼女にそれがわかっていないわけではなかった。

「でも、なにかわるいことをしていて、それが警察にわかれば二十年くらい刑務所に入れられるという人なら、自分の秘密を守るために殺すかもしれないでしょ、きっとそうだと思うわ、とてもこわい人よ。……あたしが、現実を小説みたいに思ってる女だなんて思わないでね。あたしが心配するのは、それだけの理由があるからよ。ずっと前の手紙には、ナイトクラブへ資金を出したとかいてきたことがあるわ。妹は家を売ったお金を三千万円くらい持ってたのよ。ナイトクラブがうまくいって、相棒に利益をとられるのがいやになる場合もあるわ。……ほら、この手紙を見てごらんなさい」

黒いハンドバッグの中から、彼女は二通の妹からきた手紙をとりだしておれにわたした。

「前の手紙のほうはちゃんとした字でしょ。でも、あとの分はずいぶんいそいでかいたものよ。脅迫(きょうはく)して無理矢理かかされたのじゃないかしら？」

なるほどあとの手紙のほうは、乱暴な走りがきのうえに、ふるえたと思えなくはない感じのする字がある。

「そればかりじゃないわ、あの男と会った日から、へんなことがおこるのよ。映画を見てると、へんな男が手を握りにくるし、喫茶店(きっさてん)でも愚連隊みたいな男につけまわされたわ、……こわがら

せてあたしを追っぱらおうとしてるみたい」

彼女の意見をそのまま受けとるわけにはいかないが、おれは、むくむくおこってくる、おれの興味を抑えきれなくなった。興味のやつときたら、まったく始末がわるいんだ。自腹を切ってでもおれを働かせようとする。あわてて、おれは、言った。

「そいつはどうだかね、あんたが綺麗すぎるということだろうよ」

とたんに彼女は、すっと胸をはり、憤然とした声になった。

「あたしが綺麗ですって！　生まれてはじめて聞く言葉だわ、……どこでだってあたしは、男の子みたいだと言われてきたのよ。……なにもそんなお世辞を聞くために、せっせと貯めたお金を払ったんじゃないわ」

きっとおれを見つめた。それから、ふっとあどけない顔になったかと思うと、すばらしくあまい小声で、

「でも、うれしいわ、いい気持ちよ」

と言い、くすくすっと笑い、ちょろっと紅いろの舌を出した。

まったくタイミングがよくて、男のこころを惹くこつを心得たような、ちょっとかじりたくなるような可愛らしさだった。そいつにころりといかれてしまったのか。今度は、とたんにおれが、妹という女は殺られてしまっているような気がしだした。

「すぐ戻るよ」と、おれは立ち上った。

「ちょっと電話をかけてくる、外のボックスで」
まったく彼女はだんだん素敵になってくる。急にがっかりした顔になって、おれにこう言うんだ。
「あら、奥さんになら、ここでおかけになって結構よ」
生憎、おれにはまだ、そんな厄介な荷物はない。
「そう見えるかい？　おれはどこだって、あんたは奥さんのほうから電話をかけてくる人ねと言われるぜ、……電話をかける先は、朝から晩までいろんな裸をいじくりまわしているとこさ、これから遊びにいっていいかと聞くだけさ。……もっとも」おれは、彼女へ顔を近づけ、声を落としてささやいた。「裸は死人で、おれのダチは、警官さ」
みなまで言わないうちに、彼女の顔が、ぱっと明るい笑顔になった。そいつが、おれの目に、灼きついた。あんまり近くにいたせいだろうよ。

電話で、彼女の妹に該当するような屍体がないかしらべておいてくれと頼み、おれはいそいで店に戻ってきたのだが、店に入るなり、おれはぎょっと立ちどまった。おれのテーブルのとこに、背を見せて、あみだに帽子をかぶった男が立っている。バンドで締めた男の黒っぽいコートに遮られて、彼女の顔が見えないので、おれは、知り合いかなと思ったんだが、そうではなかった。その野郎の言ってる台詞が、すぐ聞こえてきた。

「ねえちゃん、聞こえねえのかよ、おれがこってりたのしませてやるから、つきあえと言ってるんだ」

おれのコートはその席においてあるのだから、彼女が独りでないのは百も承知のうえの、ふざけた真似なんだ。おれはゆっくり近づきながら、そいつへ、

「聞こえないのか、お断わりだと言ってるぜ」

と声をかけた。ぐいとそいつがおれにむきなおった。もしかしたら酔っ払いかもしれないと思っていたのだが、むきなおったそいつの顔は、――眉の濃い、鋭い目の、そして薄い残忍そうな口と、がっしりした顎の、いかにもすご味のきいた、映画の悪役で売り出したほうが、よほど稼ぎになりそうな顔だったが、――もう、すっかりおれとやる気になっていた。じっとおれへ目を据えて、そいつは落ち着きはらって、

「おめえをお断わりだと言ってるのさ」

と言いかえした。どうやら、彼女の話は信用してよいらしい。おそらく彼女のあとをつけてきたのにちがいない。おれの商売だってもう知ってるだろうし、手間をかけてかくす必要もなさそうだ。

おれは凄んだ野郎に向かって、にっこり愛想のいい笑顔をやさしく見せてやった。ついでに、とびきり上等なストレートを、やつの顎にサービスしてやった。

野郎の軀は二間ばかりもふっ飛び、テーブルをはね飛ばして、仰向けに奥の床へひっくりかえ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com